

# 長岡京遷都前後における難波と交野

—百済王氏の本拠地の所在をめぐって—

佐藤 隆

---

**要旨** 延暦3年(784)に長岡京への遷都が行なわれた後、難波地域は大川沿岸と四天王寺周辺の2地区に大きく活動拠点が分かれて、中世に向けたまちの形成が始まる。そうした動きに対して、遷都によって失われた要素としては、細工谷遺跡における遺構・遺物の急激な減少から明らかとなった「百済尼寺」の廃絶をその代表例に挙げることができる。本論では同遺跡や田辺廃寺といった「百済郡」の範囲内と推定される遺跡の土器や瓦について、百済王氏のもうひとつの本拠地である河内国交野地域の百済寺跡の瓦と比較検討を行ない、新たな事実を指摘した。交野地域において百済寺の経営基盤となった禁野本町遺跡は、8世紀前半から東西、南北に道路を配した街区の形成が見られ、難波地域とともに百済王氏の拠点として整備されたことを、土器の年代観を再検討することであらためて明確にした。長岡京遷都前後に見られる百済王氏のふたつの本拠地における動向は、遷都という歴史的大事業がどのような背景で行なわれたかを知る重要な手がかりとなる

---

## はじめに —山背遷都後における難波地域の動向—

桓武天皇の時代における長岡京遷都によって難波宮の殿舎は解体・移築されて、都城としての難波宮は実質上役割を終えた。それに続く平安京遷都への動きのなかで、摂津職は摂津国となり、人々の活動拠点は難波津周辺の大川沿岸地区と四天王寺周辺地区とに二極分化していく。こうした動きに関する考古学的成果は、すでに積山洋氏や村元健一氏によって整理されている〔積山2002・村元2014〕。土器の年代観における詳細な部分での修正は必要と感じている<sup>1</sup>が、大きな流れは変わらない。たとえ「都城」という政治の中心としての機能は失っても、もともとこの地が有していた交通の拠点としての重要性を失っていないことは、西本昌弘氏が詳細な検討によって明らかにした〔西本2014〕。

ただし、そうした側面ばかりではなく、上町台地北端部の最高所における宮殿遺跡以外にもやはり遷都によって失われた部分も多い。その代表的な事例として、天王寺区細工谷遺跡(図1)の調査成果から明らかとなった、推定難波京城における「百済尼寺」の廃絶を挙げることができよう。7世紀以降、難波地域には百済からの渡来民の集住地としての性格をもつ「百済郡」が成立する。現在その痕跡をほとんど留めていないこの古代の行政区画のなかで「百済尼寺」は百済王氏の本拠地に置かれた氏寺として象徴的な存在と言える。「尼寺」に対する「僧寺」として、細工谷遺跡の南東に位置する堂ヶ芝廃寺は「難波百済寺」と推定されているが、廃絶に関する考古学的な手がかりはない。それに対して、細工谷遺跡では「百済尼」などの墨書土器をはじめとする井戸鎮めの土器が出土し、これらが「百済尼寺」の廃絶ないし著しい衰退を示すと考えられている。

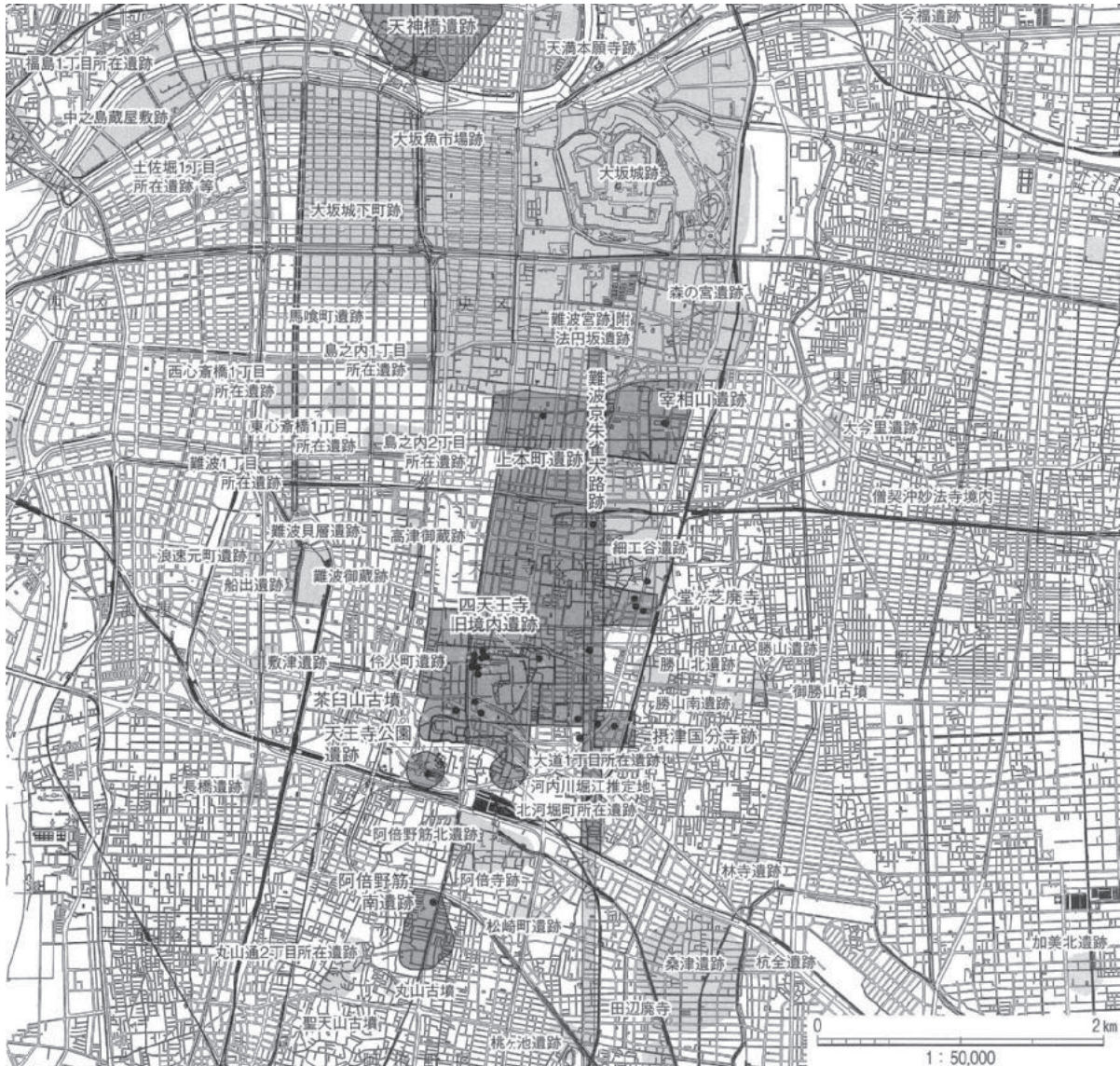


図1 難波地域における細工谷遺跡・堂ヶ芝廃寺・田辺廃寺の位置〔大市研2015〕

本論ではまず、難波地域における「百済郡」の遺跡について概観したのちに、細工谷遺跡の井戸の廃絶年代について、出土土器の編年的位置づけを再検討することによって従来の理解を見直したい。次いで、百済王氏のもうひとつの本拠地として知られている河内国交野郡（現在の大阪府枚方市など）における特別史跡百済寺跡や禁野本町遺跡の調査成果を紹介し、その年代観を確認するとともに、難波地域の本拠地との関係を整理して、長岡京遷都に百済王氏がどのように関与したかを検討する。その作業をとおして、古代都城の遷都事業の本質的理解に少しでも迫りたい。

## 1. 難波地域における百済郡の遺跡

### 1) 百済郡の推定域とその周辺の遺跡

細工谷遺跡の調査成果によって明らかになった「百済尼寺」の存在は、「難波百済寺」と推定される堂ヶ芝廃寺とともに百済王氏の氏寺が難波地域に置かれたことを示す。これらの遺跡のあたりから南へ展開する「百済郡」は、百済王氏をはじめとする朝鮮半島からの渡来民が集住する地域であった

と考えられている。現在はその痕跡をほとんどとどめていないこの行政区画の範囲については諸説あるが、広くみた場合には現在の大阪市東住吉区の北部あたりまでが含まれる。埋蔵文化財包蔵地としては、上町台地東縁部には先に挙げた堂ヶ芝廃寺や細工谷遺跡以外にも、出土瓦について後述する東住吉区桑津遺跡や田辺廃寺があり（図1）、近年に発見された遺跡として生野区の林寺遺跡〔大市教・大市協2002〕や生野東遺跡〔大市研2014〕などがある。林寺遺跡では掘立柱建物や溝などの遺構が見られ、8世紀代の土器が出土した。生野東遺跡では建物の遺構は見つかっていないが、7世紀後半～8世紀初頭の土器に伴って古い製作技法の瓦が出土し、付近に寺院の存在が推定されている。また、さらに東方の平野部には、生野区巽東3丁目所在遺跡〔大市教・大市協2009〕、巽北遺跡〔大市教・大市研2011〕、中川遺跡〔大市研2012〕などがある。巽東3丁目所在遺跡では8世紀代の溝や土壙が見つかった。建物の遺構はないが、土器の比較的大きな破片が出土しているため、集落は近いと考えられる。巽北遺跡・中川遺跡も顕著な遺構はないものの、7～8世紀の土器が出土した。これらは、郡域内というよりはその周辺に点在するような状況で存在していたのであろう。

ここで挙げた遺跡では、土器・瓦などの古代の遺物の年代がいずれも難波宮が存続していた期間にほぼおさまるという共通点がある。細工谷遺跡はそのなかでも代表的な遺跡であり、難波宮や「百済尼寺」の廃絶に関わって取り上げられてきた。以下ではその井戸の出土資料について検討する。

## 2) 細工谷遺跡井戸SE507の廃絶年代

細工谷遺跡は推定難波京城のなかで左京に当たる地域に位置する。1996年・1997年に行なわれたSD96-1・97-1次調査によって埋没した谷地形が発掘され、和同開珎の枝銭が出土したことで注目を集めた〔大市協1999b〕。また、調査区のほぼ全域から見つかる多量の瓦とともに、井戸SE507からは「尼寺」「百尼」「百済尼」といった墨書のある土器が多数出土し（図2）、かつて調査区周辺に「百済尼寺」が存在したことが明らかとなった（ただし、伽藍の明確な遺構はその後の調査でも未発見）。また、それらの土器が井戸鎮めに用いられたと考えられることから、「百済尼寺」の廃絶を示す資料としても重要視され、発掘調査報告書ではその時期を平城宮土器VI（奈良時代末葉～平安時代初頭）と年代づけている<sup>2</sup>。積山洋氏もこのSE507について「平城宮VI併行期」に埋められていたと紹介し〔積山2002〕、「その後遺構はいったん途絶え、遺跡は廃絶ないし大幅に衰退する。」とこの時期に大きな画期があることを指摘する。『続日本紀』延暦2年冬10月戊午・庚申・壬戌条の記事を引用して、長岡京・平安京遷都という趨勢のなかで難波地域の「百済尼寺」が河内国交野郡へ転出したと述べた。同調査ではその後の時代の遺構・遺物も見つかっているが、調査地全域から出土する瓦をはじめとする遺構・遺物の著しい減少からみて、やはりSE507の廃絶時期が重要であることは動かない。出土した土器の年代は長岡京へさらに平安京へ遷都が行なわれた時期とされ、「百済尼寺」の廃絶を上記の難波宮廃絶によって起ったものとしてこれまでの研究史においては考えられてきた。

しかし、この資料をあらためて検討すると、難波地域で8世紀末～9世紀初頭と年代づけている難波V新段階（図3〔佐藤隆2000・2014b〕）の代表的資料と比較した結果、少し古い様相をもつことが明らかとなった。図4の「・」は難波V新段階の代表的資料である大坂城跡OS90-50次調査の井戸

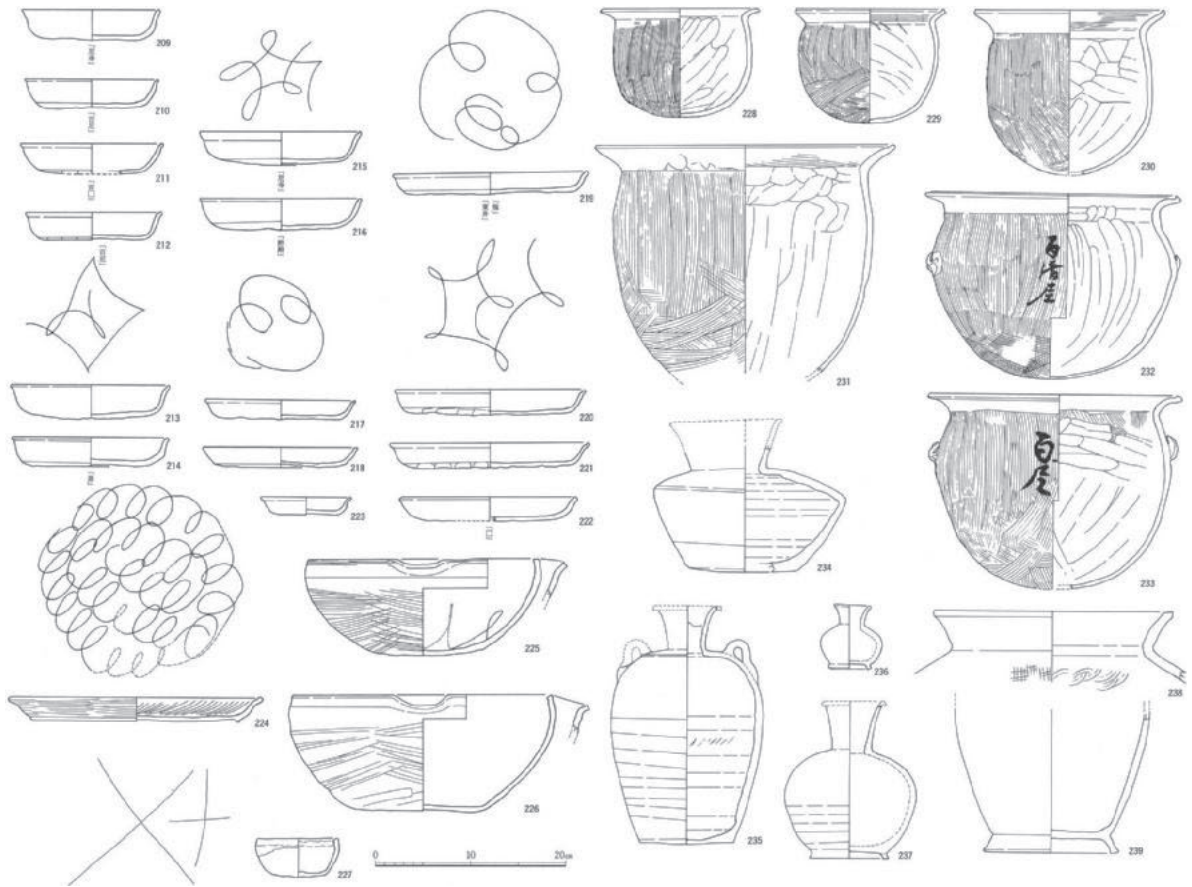


図2 細工谷遺跡井戸SE507出土土器〔大市協1999b〕

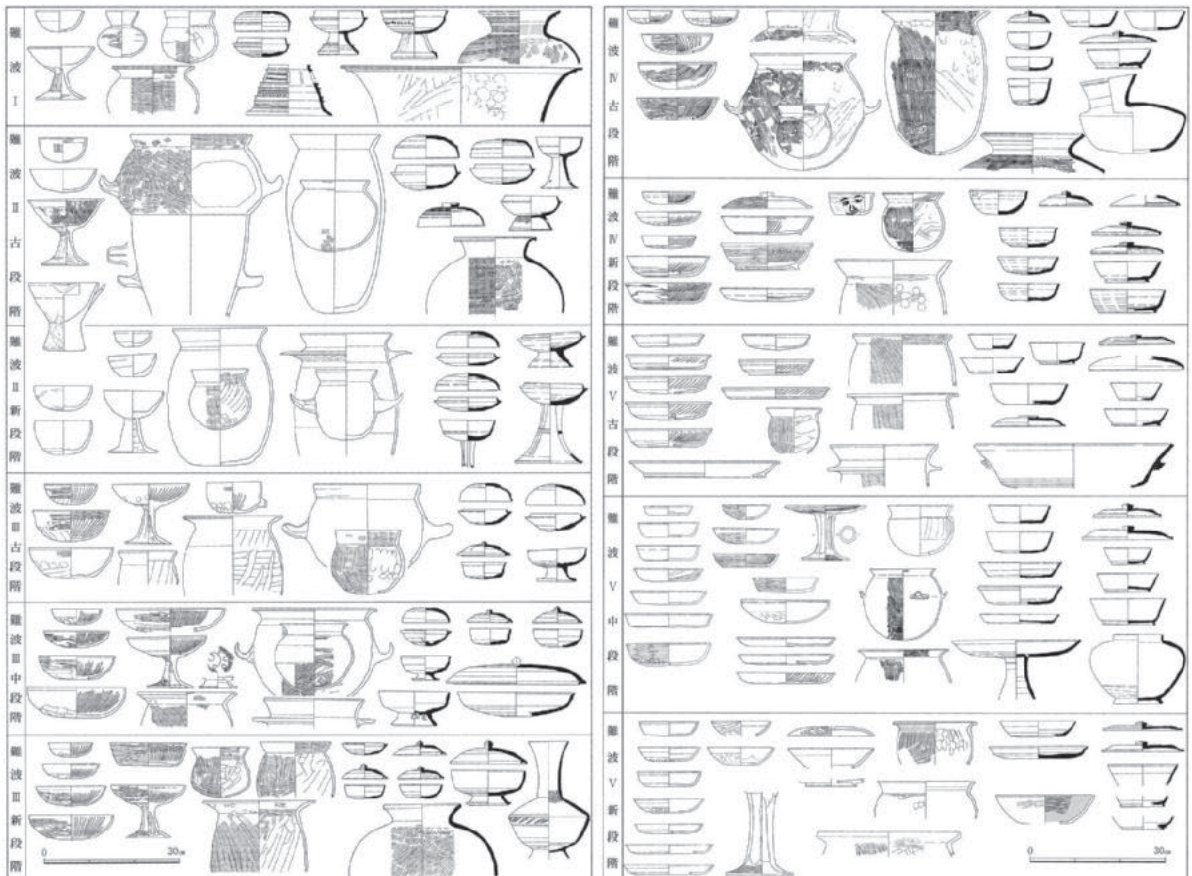


図3 難波地域の土器編年〔佐藤隆2000〕

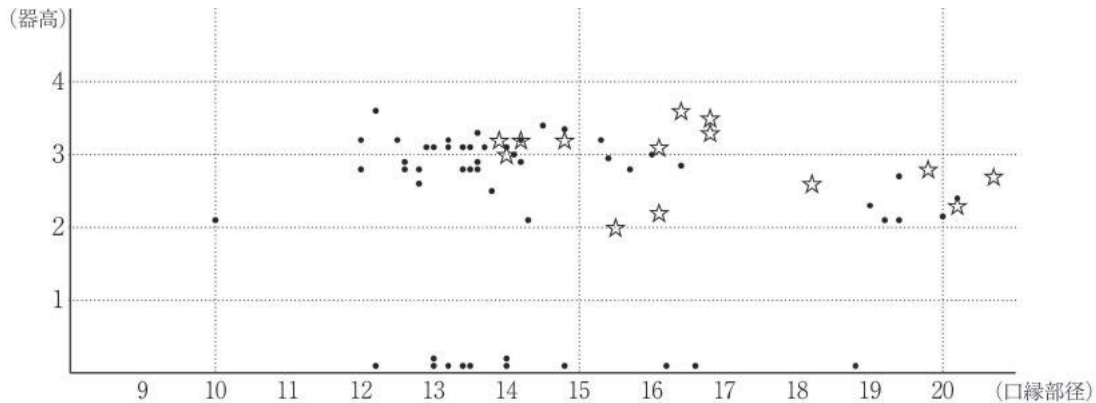


図4 細工谷遺跡井戸SE507出土の土師器食器類の法量分布

SE502出土土器〔大市協2003〕のうち、土師器の食器類の法量分布を示したものである。これらに重ねて、細工谷遺跡SE507の土師器食器類の法量を「☆」で示すと、こちらの分布はSE502よりもやや大きいほうへ偏っている。つまりSE502はSE507よりも法量の縮小が進んでおり、新しい様相をもつことがわかる。SE502にはまったく見られない緑釉陶器・灰釉陶器を伴うOS97-1次調査SE101〔大市協1999a〕や9世紀第2四半期頃の平安京の土器を伴うOS91-54次調査SD506〔大市協2003〕は、SE502と比べると大きめの法量の杯類が見られない。この違いは、おそらく難波V新段階のなかの細かい様相差と捉えられることから、SE502の年代は9世紀初頭より新しいほうへ大きく降るとは考えられない。したがって、さらに古い様相をもつSE507の廃絶に伴う土器群は8世紀末のなかでもやや古く年代づけられる可能性が高い。

次には、難波地域の百済郡に関連する諸遺跡とも関連させながら、北河内に百済王氏が築いたもうひとつの拠点について検討してみたい。

## 2. 百済王氏のもうひとつの本拠地 - 河内国交野郡の遺跡 -

### 1) 百済寺跡

大阪府枚方市に所在する百済寺跡は、古代における河内国交野郡（北河内）において百済王氏が建立した寺院の遺跡である。

昭和7年（1932）に行なわれた発掘調査では、瓦の年代は「奈良朝末期乃至平安期初期の二種がある如く思はれ」と記されている〔大阪府1934〕。また、史料から検討された部分では、①百済寺の史料上の初見は『続日本紀』延暦2年冬10月庚申条であること、②百済王敬福の河内守補任を契機として百済王氏の難波地域から交野地域への移住が行なわれたと考えられることの2点から、百済寺の創建は天平勝宝2年（750）から延暦2年（783）までの間と推定されている。

次いで、昭和40年（1965）に行なわれた発掘調査の報告書〔大府教1965〕においては、「創建は瓦の様式から8世紀後半」「創建時（8世紀後半）」という表現があり、建立者を百済王敬福と推定して、敬福の河内国交野郡への移居の契機を天平勝宝2年（750）の河内守補任に求める考え方が示されている。軒瓦のなかに点数としては少ないながらも奈良時代でも古くに溯る型式のものが見られることと、史料から導かれた年代観が結び付いたものと推量できる。

その後、古閑正浩氏は百済寺の軒瓦について、都城や周辺の寺院・官衙を含む諸遺跡との同範・同文関係を整理して詳細な考察を行なっている〔古閑2010〕。軒瓦を1群（百済寺付属造瓦所の製品）・2群（河内国分寺系造瓦所の製品）・3群（平城宮式軒瓦）・4群（平安宮系造瓦所の製品）に分類している。これらのうち、多数を占める1群の軒平瓦ハA種・B種（後述する『特別史跡 百済寺跡』〔枚方市文調2015〕のH01A・B、図5）は、文様の特徴が平城宮式6691型式A種（6691Aと略す。以下同様）や同6689Cに近似することから、宝亀年間（770～781年）頃と推定した。2群や3群のなかで

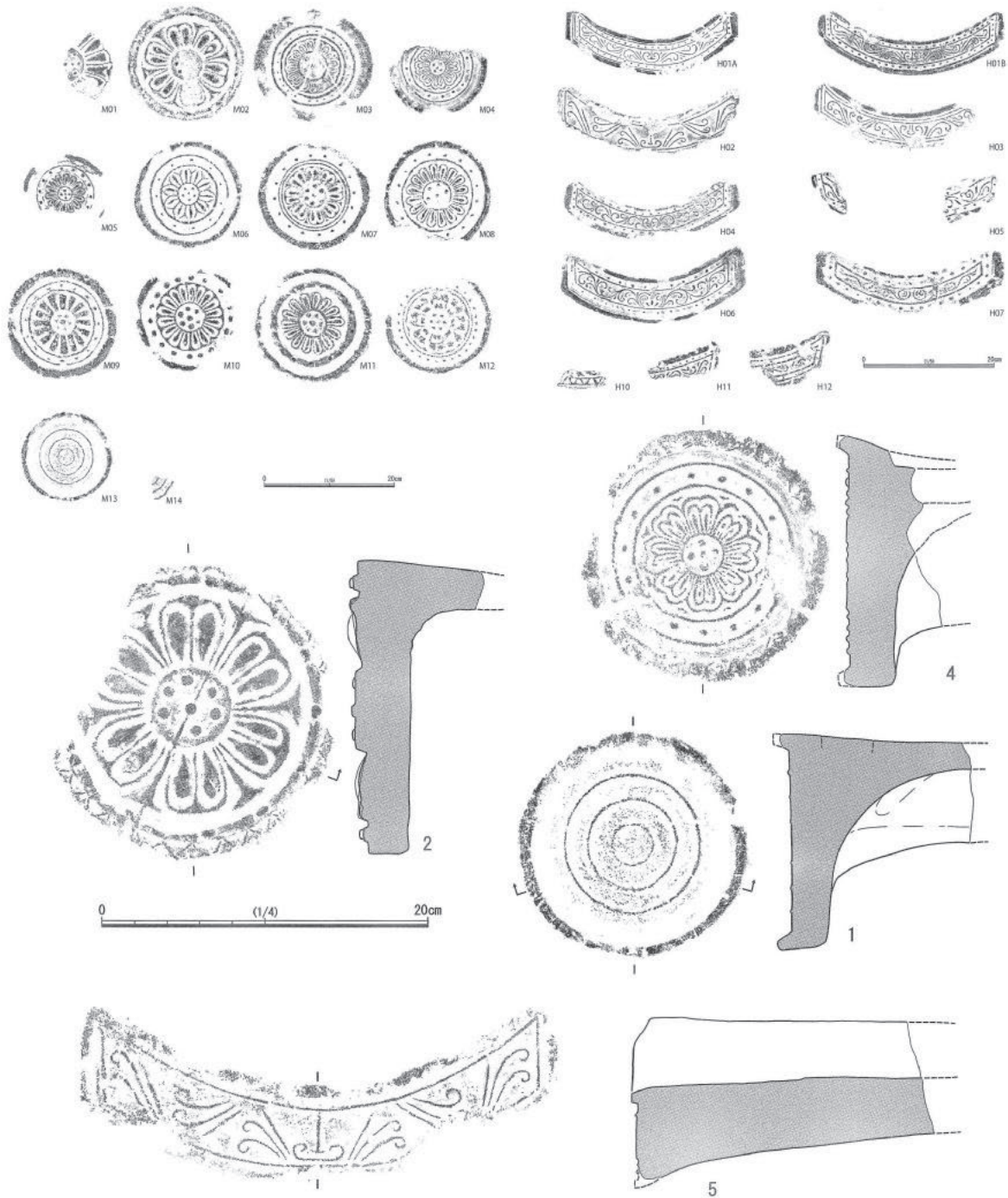


図5 百済寺跡出土軒瓦〔枚方市文調2015〕

形式的に古く位置づけられる軒瓦は、点数が少ないことから、宝亀年間頃に供給されたものか、奈良時代中頃に堂舎が存在したのかは決し難いとする。ただし、こうした少数の軒瓦についても、平城宮や南山城、河内といったさまざまな地域との同範・同文関係が認められ、百済王氏と王権との関係のなかで供給されたものと評価した。

また、最近刊行された発掘調査報告書〔枚方市文調2015〕では、古代の軒丸瓦14型式、軒平瓦10型式11種が整理されて報告された（図5）。軒平瓦のうち70%弱を占める主要な型式であるH01A・Bの瓦当文様は平城宮式6691Aや同6689Cに近似することから、古閑氏の年代観を支持している。吉志部瓦窯から供給された平安宮初期の軒瓦の存在などもあわせて、8世紀後半～9世紀初頭頃の短期間に集中して各伽藍が造営されたという見解が示された〔狩野2015〕。後で述べるように、古閑氏が言及していなかった難波宮の重圏文軒丸瓦の存在やそこから結び付けられた細工谷遺跡の軒瓦との関係も明らかになった。

以上のように、古閑氏は宝亀年間（770～781年）に大規模な造営を想定し、さらに狩野氏は古い型式の瓦は造営の途中段階での搬入と考えて、宝亀年間の造営開始から平安時代初期にかけてきわめて短期間に集中した造営事業の姿を明らかにした。これは、昭和7年の発掘調査報告書で示された瓦の年代観に近い。ただし、H01A・Bの年代は祖型となった平城宮式6689Cから宝亀年間と考えられているが、厳密に言うと、平城宮式6689Cは平城宮・京の軒瓦編年では宝亀年間から長岡京遷都までのV期（770～784年）に位置づけられている〔毛利光・花谷1991〕。百済寺のH01A・Bはその影響を受けて製作されたので、V期の年代を上限とする应考虑すべきであろう。難波地域でみた「百済尼寺」の廃絶ときわめてよく似た年代観となることは興味深い。百済寺では、難波宮所用の軒丸瓦の6021型式=M13（図5-1）、6012型式=M14の2型式が存在することが確認されている。SD96-1・97-1次調査で出土している型式が、現在難波宮で19型式21種が認められているなかのこのわずか2型式であることは、やはりこれらの寺院の深い関係を物語るものと言えるかもしれない。特に6021型式は難波宮跡では3点（主に史跡範囲での出土数、2005年時点での集計結果〔大市協2005〕）しか出土しておらず、各圏線および外縁の間隔がほぼ等しいという特徴から創建時と考える一群のなかには含めていない〔佐藤隆2014a〕。それが百済寺跡で14点も出土していることは注目される<sup>3</sup>。

さらに、上記の重圏文軒丸瓦以上に難波地域とのつながりを示唆する資料がある。百済寺のH02型式（図5-5）は大阪市東住吉区の田辺廃寺（桑津遺跡）出土資料（図6〔大市協1998〕）との同範が指摘されている〔古閑2010・枚方市文調2015・狩野2015〕。特に狩野氏は範傷が一致することまで言及している。同氏は瓦範の移動か、製品の移動かは判断を保留しているが、田辺廃寺から出土したH02と同範の軒平瓦の凸面に布目圧痕（写真1-右）が観察できる個体があり、百済寺と同様に押圧技法で製作されたと考えられる。このことから製品が移動した可能性が高くなったが、はたして古閑氏や狩野氏が考えるように百済寺から田辺廃寺へ方向なのであろうか。

ここで、百済寺でH02と組み合うM04（図5-4）に着目してみたい。田辺廃寺では百済寺でH02と組み合うM04と同範と考えられる複弁八葉蓮華文軒丸瓦が出土している〔山本1926・前田1983〕。正式な発掘調査で出土した個体は残りが悪くて、実物どうしの比較が難しい状況であるが、凸凹に乏

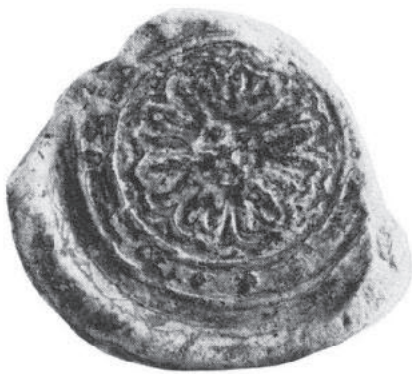
しい瓦当面に配置される複弁蓮華文の特徴や中房の蓮子の数(1+4個)、外区の珠文の数(15個)、それらの位置関係、および外縁の内側に巡る細い圈線が一致することから同範である可能性が高い。写真1-左下の画像では複弁蓮華文の細部が確認できず、百済寺跡出土例で図示された個体には瓦当に丸瓦部が取り付く位置が異なっているものがあるなど、今後、確実な出土例によって検証する必要がある



百済寺 H02 と同範の軒平瓦の范傷(筆者撮影)



百済寺 H02 と同範の軒平瓦の凸面布目圧痕(筆者撮影)



百済寺 M04 と同範?の軒丸瓦([前田 1983]より)



百済寺 H02 と同範の軒平瓦の凸面布目圧痕(筆者撮影)

写真1 田辺廃寺(桑津遺跡)出土軒平瓦の范傷・布目圧痕と軒丸瓦

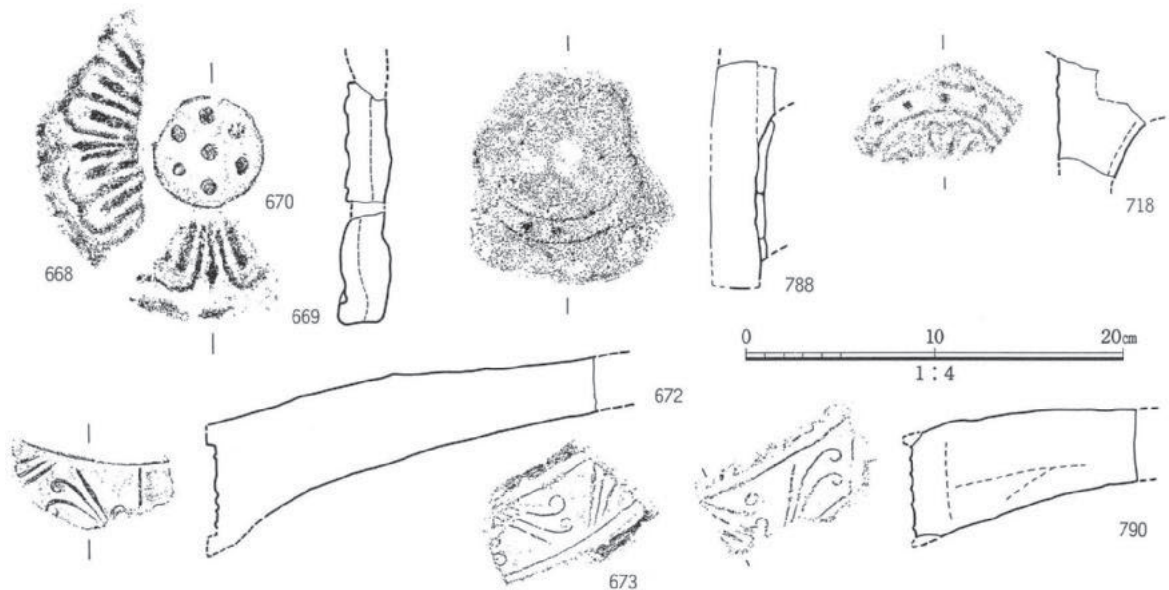


図6 田辺廃寺(桑津遺跡)出土軒瓦 [大市協1998]

あるが、この組合せの存在を認めるならば、百済寺において主に東塔で集中して用いられたM04-H02の組合せが田辺廃寺でも成立していたことになる。この組合せは平城宮式6291B-6702Gを祖型として成立したと考えられている。平城宮・京の軒瓦編年ではⅢ期に位置づけられ、M04-H02へ至る文様の変化にどれほどの年代を見積もるかは不明であるとしても大きく降らせる根拠はない。この組合せが宝亀年間（770～781年）以降になって百済寺所用として製作されたと考えるよりは、8世紀中頃か後半でも早い時期に田辺廃寺所用として製作され、その廃絶とあわせて百済寺へその組合せのまま、あるいは他の資材とともに運ばれたとするほうがより整合的ではないかと考える。桑津遺跡B地点KW09-1次調査地は田辺廃寺の西に位置し、地形の検討から寺域が現在の理解よりも西にずれると推定されている範囲内に当たる〔大市研2011〕。この調査では8世紀第4四半期頃に廃絶したと考えられる井戸SE01が見つまっている。年代を探るうえで数少ない手がかりである。先に明らかにしたように、百済寺の造営開始時期は難波地域では「百済尼寺」（細工谷遺跡）の廃絶時期にきわめて近い。そうした時期に田辺廃寺へ百済寺の瓦が運ばれる必然性は低いと考えられよう。

古代の百済郡の範囲には多くの説があるが、比較的広く考えた場合の郡域に含まれる田辺廃寺から百済寺の造営に関係する軒瓦が出土すること<sup>4</sup>は、細工谷遺跡の後期難波宮同範の重圈文軒丸瓦の存在と同様に注目すべき事実である。

## 2) 禁野本町遺跡

百済寺跡に近接する禁野本町遺跡は、百済寺建立の基盤となった百済王氏の拠点と考えられる。この遺跡では、南北、東西に配された道路遺構によって街区とも言うべき区画が形成されており、一般的な集落とは一線を画する。その成立年代は8世紀前半とされ、一部の遺構はさらに溯る可能性があると考えられていたが〔枚方市文調2006〕、最近異なった見解が出されて遺跡の評価が変わりつつある。ただし、この異なった見解は土器の年代観によるところが大きく、筆者はそれに問題があると考えている。以下、禁野本町遺跡の土器の年代論について検討してみたい。

井戸竜太氏は禁野本町遺跡から出土する土器の年代を8世紀後半からとする。井戸氏の論点は『禁野本町遺跡Ⅳ』のなかの考察編で述べられている〔井戸2013〕が、『特別史跡 百済寺跡』〔枚方市文調2015〕で掲載された図がその内容を具体的に示しているので、あわせて検討する（図7）。

井戸氏は禁野本町遺跡の土器の年代を検討するにあたって、9世紀中頃以降に圧倒的多数となる都城系の一群（井戸氏のA形式、以下同様）や都城系を模倣した在地系の一群（類A形式）について平安京の土器の年代観を準用させることで暦年代を推定することが可能になるとした。そこから溯る形で在地系の一群（LoA形式）と類A・A形式の共存を、やはり平安京の土器の年代観と対比させて9世紀前半頃と推定する（図7）。井戸氏はさらに8世紀後半～9世紀初頭頃の土器の年代推定を行ない、その段階では在地系のLoA形式だけで土師器食器類が構成されているために都城系の類A・A形式を手がかりとした年代推定ができないとして、交野地域でのLoA形式と都城系のA形式とでそれぞれ何型式分遡れるかを並行関係の根拠とする。その結果、第172次調査で出土した最も古い土器群が8世紀中頃を溯らないという見解を示した。

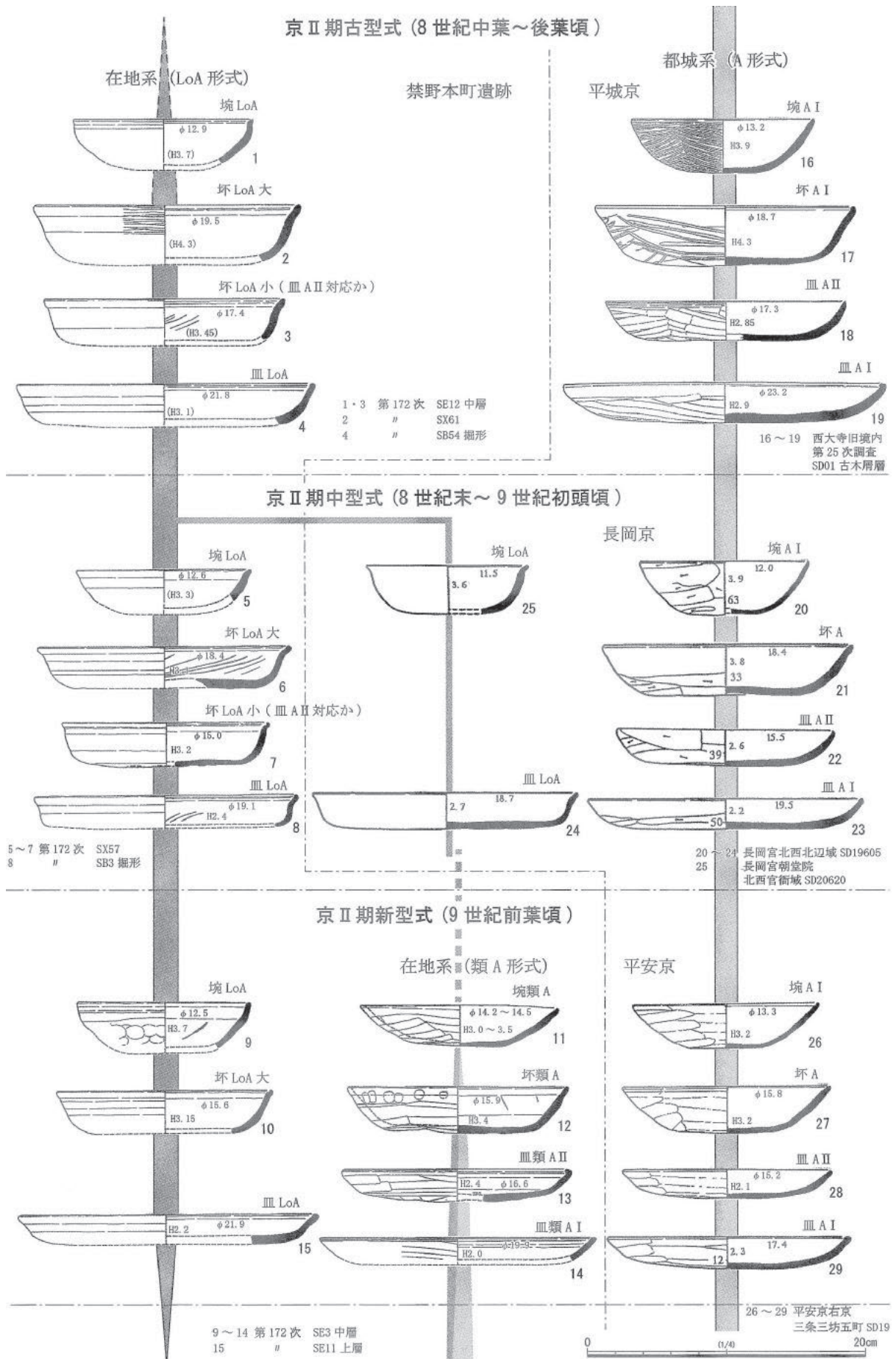


図7 井戸竜太氏による禁野本町遺跡の土器編年〔枚方市文調2015〕

筆者は、こうした井戸氏の論点にはいくつかの問題があると考えている。

第一点、図7の上段・中段は井戸氏が多段をもとに左列のLoA形式と右列のA形式について、それぞれ何型式分廻れるかをもとに並行関係を推定したものであるが、それぞれの形式について型式ごとの年代幅をどれくらい見積もれるのかは示されていない。したがって、左右列の上段・中段の並行関

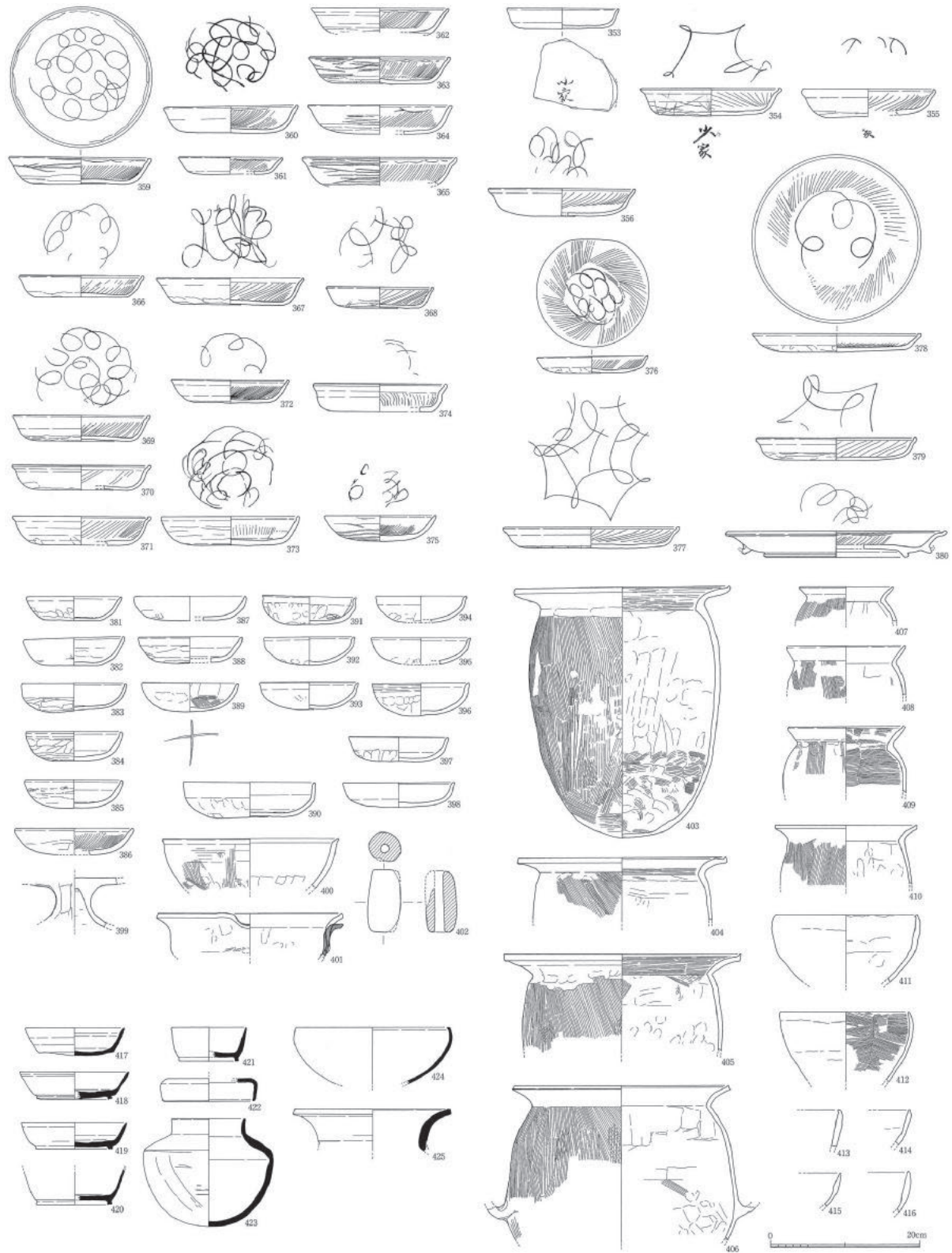


図8 禁野本町遺跡井戸SE06出土土器〔枚方市文調2006〕

係は、左右の要素を直接比較できなければ証明されないと考える。

第二点、杯の口縁部から体部の形態を比較して型式組列を検討する際に、同遺跡第172次調査落込みSX61と難波地域の「大坂城跡第6層」(OS90-51次のSK501・第5層〔大市協2003〕)の資料と平城宮跡SK219の資料の三者で比較を行ない、「大坂城跡第6層」よりもSK219に近いことから平城宮土器Ⅳに並行すると位置づけている。しかし、「大坂城跡第6層」の杯は難波地域の在地色が顕在化しつつある段階で、前段階より口縁部が著しく屈曲する特徴をもっていることから、平城宮の土器であるSK219の資料と単純には比較できない。SX61の土師器杯には暗文を密に施す個体もあり、それらは「在地系」とみるよりは、むしろ平城宮跡における平城宮土器Ⅲに近いと考えたほうが良い。

第三点、図7左列中段の土器のなかには口縁部の屈曲が著しく、暗文がやや粗く施されたものが掲げられているが、これは難波地域における難波Ⅴ中段階の土器に形態・技法とも類似する(図3)。この段階は長岡京期ではなく、平城宮土器Ⅳ～Ⅴに並行する。8世紀後半において、体部外面ヘラケズリ技法の土師器食器類がほとんど見られない土器組成は、平城宮・京とはまったく異なっており、むしろ難波地域の土器の影響下にあると言える。

第四点、SX61より数量の点でまとまった資料として第103-3・4次調査で出土した土器群がある。そのうち、井戸SE6には斜放射状暗文に加えて口縁部内面に連弧状暗文が施された土師器杯があり、平城宮土器Ⅱの特徴を有している(図8-359~365〔枚方市文調2006〕)。これらを「在地系」と呼ぶことはできない。他に斜放射状暗文のみの杯もあるので、井戸の埋没には少し時期幅がある可能性もあるが、それでも8世紀前半にはおさまる資料であろう。高杯(399)や把手の付いた甕(406)も8世紀後半には降らない。また、他の遺構にはさらに古い特徴をもつ土師器・須恵器の土器群も見られることから、禁野本町遺跡の成立が8世紀前半にまで遡ることは確実である。

第五点、井戸氏は須恵器を含めた検討をしていない。これは編年の起点を9世紀中頃以降にしていることも一因であるが、8世紀代の食器類の変遷を語るうえでは須恵器もまた重要な要素である。上記の筆者による検討においては、須恵器食器類の変化も整合している。

以上のことから、井戸氏の主張する禁野本町遺跡の土器の年代観には問題があると考えられる。交野地域において百済寺の造営基盤となった禁野本町遺跡の成立年代は8世紀前半に遡ることをあらためて確認しておきたい。この年代観はこれまでの研究史で述べられてきたような、交野地域の開発の契機を天平勝宝2年(750)の百済王敬福の河内守補任に求める考え方とは一致しない。また先述のように、難波地域の「百済尼寺」の廃絶と交野地域の百済寺の創建との関係はかなり年代が近接する可能性が高く、これらとも年代としては隔たりがある。こうした事実は、従来の研究史上で述べられてきた難波地域と交野地域との関係、本拠地の移動といった問題と照らし合わせながらどのように理解すれば良いのか、次には交野地域と長岡京との関係を中心に検討してみる。

### 3. 交野の遺跡と長岡京遷都との関係 —本拠地の移動について—

今井啓一氏は、百済王氏が敬福の河内守補任を契機に難波地域(摂津国百済郡)を離れて、百済寺跡や禁野本町遺跡がある河内国交野郡の地に移住したと考えている〔今井1958〕。この説は先にも触

れたとおり、昭和7年調査の報告書〔大阪府1934〕ですでに考え方が示されており、特に新たな事実によるものではないが、研究史上は百済王氏における北河内（河内国交野郡）との関わりが始まりを示した論として、その後一定の影響力をもつこととなった。

この今井氏の説に対して、積山洋氏は天平勝宝2年（750）の河内守補任を契機に交野地域へ移住したという考えは史料上の根拠がないと批判した〔積山2010〕。細工谷遺跡SE507の廃絶は「奈良末～平安初期の長岡宮併行期ごろ」で、遺跡の衰退はこの後と考へ、百済寺が奈良時代の創建としても「難波の本拠地が健在である限り、別業地の氏寺」と評価した。長岡京遷都およびそれに続く平安京遷都に伴って淀川の水上交通が政治的にも経済的にもいっそう重要なものとなっていくなかで、百済王氏が交野地域への移住を選択したという考えである。ただし、積山氏はその後、百済寺の多数を占める軒瓦を宝亀年間頃とする古閑正浩氏の説〔古閑2010〕を引用して、百済王氏の交野への「移貫」（おそらくは移住の意<sup>5</sup>）が延暦年間以前に始動していた可能性は否定できないと述べている〔積山2012〕。延暦2年以前は準備期間中で、細工谷遺跡SE507の廃絶は「移貫」（移住？）の最終段階を示すと解釈して、少し自説を修正している。

細工谷遺跡SE507の廃絶や百済寺の造営開始は、これまで本論で検討してきた結果によれば、宝亀年間（770～781年）とまでは言い切れないとしても、長岡京遷都が始まった延暦3年（784）よりやや遡る可能性はあると考えられる。また、これも本論であらためて確認したように、交野地域では遅くとも8世紀前半頃には百済王氏によるこの地の開発が始まっており、東西、南北に道路が配置されて計画的な街区が形成されていた。

こうした開発のようすを勘案すると、積山氏が述べるように、長岡京遷都の頃に難波地域から交野地域へ百済王氏の本拠地が移ったとみることは認められるとしても、8世紀を通じて両方の地域に百済王氏が拠点を置いていたと考えることは可能であろう。それでは、長岡京遷都（難波宮廃絶）が行なわれたから本拠地を移動させたのか、という問題については、筆者は発想を逆にする必要があるのではないかと考えている。

ここで、交野地域を長岡京の側からの視点でみてみよう。長岡京遷都から1年後、『続日本紀』延暦4年11月壬寅条には「祀天神於交野柏原」という記事がある。さらに同延暦6年11月甲寅条にも「祀天神於交野」の記事がある。桓武天皇は交野の地において昊天上帝と先帝（光仁天皇）を祀る中国歴代皇帝と同様の祭祀を執り行った。長岡京を新たな王朝が始まる都として位置づけたい桓武天皇にとって、交野地域は特別な場所であったことがわかる。その基層には桓武天皇が重視する中国的な思想があった。百済寺や禁野本町遺跡から南東の方向にある交野山は長岡宮大極殿のほぼ南延長上に位置するという指摘がある〔福永光司・千田稔・高橋徹1987〕。長岡京の位置を決めてからこの地を選んだのではなく、逆に長岡京がこの位置関係を意識して選地されたとするこの説は百済寺や禁野本町遺跡の重要性を考えるうえでも興味深い。また、さらに視点を広げて、長岡京の東西南北それぞれには京の周縁地としての機能をもつ「郊」「野」があり、そのうち南北の郊野については、北は秦氏、南は百済王氏の勢力圏であって、それらをもとに長岡京の京城が設定されたという指摘もある〔佐藤文1995〕。交野の地を拠点にしていた百済王氏が長岡京遷都に主導的な役割を果たした可能性はきわめ

て高いと言える<sup>6</sup>。

こうした考え方は、本論でこれまで述べてきた難波地域の「百済尼寺」の廃絶年代や、交野地域における禁野本町遺跡の成立年代、百済寺の創建年代といった考古学的成果に符合している。以下、あらためて整理してみよう。

難波地域においては百済からの渡来民の居住地として「百済郡」が7世紀中頃～後半に成立した。そこでは百済王氏の氏寺として、「難波百済寺」（堂ヶ芝廃寺）や「百済尼寺」（細工谷遺跡付近）が造営されたほか、南には田辺廃寺などの寺院も営まれた。「百済尼寺」の廃絶は、井戸鎮めを行った土器の年代観から長岡京への遷都が始まった前後の時期に絞られる。その後、さらに平安京への遷都が行なわれるなかで、本論の冒頭に述べたように、難波宮の廃絶に伴って難波地域における都市の構造は大きく変わっていくが、そうした動きが本格化する前にすでに「百済尼寺」は廃絶していた可能性がきわめて高い。

一方、交野地域における百済王氏の開発は8世紀前半には本格的なものとなっていたとみられる<sup>7</sup>。百済王氏は難波と交野のふたつの地域に拠点をもちながら、当時の政権にも深く関わる活動を行ってきたのである。そうしたなかで交野地域における百済寺の創建は、軒瓦の検討から難波地域における「百済尼寺」の廃絶と年代がきわめて近い可能性が指摘できる。本論で禁野本町遺跡や百済寺の年代観をあらためて整理したことによって、百済王敬福の河内守補任は交野地域の開発の大きな契機と評価できないことが明らかとなった<sup>8</sup>。

長岡京遷都においては、桓武天皇にとって重要な祭祀を行なう南郊としての交野地域の役割が重要であり、百済王氏は長岡京に都が遷ったから、それに従って本拠地を移したのではなく、自らの本拠地を新たな都の位置を決める定点にすることで、遷都事業の主導的な役割を果たしたと言える。難波地域での「百済尼寺」の廃絶と、交野地域での百済寺の創建がほぼ同時期であること、そのタイミングが遷都事業の始まる少し前か、始まった頃に絞り込めることは、百済王氏が長岡京遷都を決めた段階で交野地域に本拠地を移して、そのシンボルとなる壮大な氏寺を新たに建立したことを示している。また、本論ではそうした動きのなかで難波地域の田辺廃寺から瓦が百済寺へ動いた可能性を指摘した。百済王氏が本拠地を難波地域から交野地域へ移すことによって、「百済郡」も衰退への道をたどったのではないかと考える。

## むすびにかえて

以上、有力な渡来系氏族である百済王氏のふたつの本拠地における遺跡の動向を長岡京遷都と関連づけて検討してきた。本論の最後に、もういちど視点を難波地域に戻して、長岡京遷都から後の百済郡に推定される地域の動きについて述べておきたい。

難波地域に都があってその求心力のもとで都市が拡大する際は、これまで周縁部であったところに新しい居住域が形成され、それに対応する形で周縁部がもっていた機能も外へ出て行くことになる。古代の百済郡も、百済滅亡前後の渡来人の増加を背景にして、難波宮とその基盤となった古代の都市の周縁部に渡来人の居住地がおかれ、それが郡という形に発展したと考えられる。難波宮廃絶後に遺

構・遺物がともに激減する事実は、史料の上では百済郡や「難波百済寺」が平安時代まで残ることが読み取れるとしても、百済郡のその後の姿をある程度示していると考えられる。

その後、中世・近世ではこれらの遺跡があった一帯には耕作地が広がり、集落はあまり大規模なものは見られずに、そのなかで点在するという状況が基本的には変わらずに続く。やがて近代に入ると、「大大阪」と呼ばれる都市域拡張の動きのなかで、工場労働者の需要増加を背景に新たな人々が流入することによって安定していた集落と耕作地との関係が崩れて、耕作地や未開発地まで都市の境界を越えて居住域が広がっていく。そして現代の景観が形成される。

時代も、そこで暮らす人々のようすもまったく異なるけれども、こうした都市の衰退や拡大のあり方には共通する要素もあるのではないか、それは大阪の都市史をみていくうえで重要な視点ではないかと筆者は考える。

## 註

- (1) 土器の変化からみると、5世紀以来続いてきた流れが9世紀前半にいったん途切れ、空白期間を経て10世紀後半頃から平安京と同じ土器様式が導入される。この空白期間が生じた背景や前後の時期に活動した人々の系譜的つながりの有無については今後の課題である。
- (2) 報告書ではSE507の土器の年代は「平城宮土器Ⅵ」とされている。その根拠としては土師器杯・皿の法量と須恵器壺M（丸みのある肩部をもつ小形の瓶）の存在が挙げられているが、前者の検討データは示されておらず、どのような土器との比較に基づくのか不明である。後者の須恵器壺Mはとくに平城宮土器Ⅵだけでなく、その前の段階にも見られる器形であり、年代を限定するのは難しい。
- (3) ただし、細谷谷遺跡で出土した瓦のうち、百済寺跡で見られるのは6012型式と6021型式のみである。主体となる複弁蓮華文・重弁蓮華文軒丸瓦や忍冬唐草文・均整唐草文・重圈文軒平瓦などは同範品が1点も見られないことから、伽藍の建物が移築されたとは考えにくい。百済寺跡に多い6021型式が後期難波宮でも後出のものとする、「百済尼寺」の補修のために用意された瓦が交野地域で新造される百済寺のために供給された可能性が考えられよう。
- (4) 大阪府柏原市に所在する田辺廃寺は、渡来系氏族である田辺史氏の氏寺と理解されているが、百済寺跡の軒瓦との同範関係はない〔大府教1972〕。
- (5) 本論で検討する百済王氏の本拠地の移動について、これまでの研究では「本貫地の移動」あるいは「移貫」といった表現を用いる例がいくつか見られるが、「本貫」は戸籍・計帳に登載された本籍地といった意味の語であり、氏族が勢力基盤を移す、という意味での用例は少なくとも六国史や律令には見られない。
- (6) 長岡京の北郊については現在のところ難波地域との関連が見出せないので、本論ではひとまず南郊に限定した検討を行なう。
- (7) こうした年代観であれば、図5-2のような年代の遡る軒丸瓦も初期の開発に伴うものとして理解することができよう。
- (8) 7・8世紀において河内国の中心部は現在の藤井寺市、羽曳野市、柏原市のあたりであり、国府や国分寺もこの地域に置かれた。また、百済寺の創建も8世紀末頃と考えるのであれば、河内守補任と交野地域を結び付ける考えはそもそも意味がなかった可能性もある。

## 【引用・参考文献】

井戸竜太2013、「土器群の推定実年代幅について」『禁野本町遺跡』Ⅳ－市立枚方市民病院の新病院整備事業に伴

- う禁野本町遺跡第172次調査報告書－、枚方市文化財研究調査会、200－203
- 今井啓一1958、「撰津国百濟郡考（上・下）」『続日本紀研究』第58・59号、続日本紀研究会、23－31・12－25
- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2002、『平成12年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』  
2009、『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書（2007）』  
大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2011、『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書（2011）』  
大阪市文化財協会1998、『桑津遺跡発掘調査報告』  
1999a、『大坂城跡』Ⅳ  
1999b、『細工谷遺跡発掘調査報告』Ⅰ  
2003、『大坂城跡』Ⅶ  
2005、『難波宮址の研究』第十四
- 大阪文化財研究所2011、『桑津遺跡B地点発掘調査報告』  
2012、『中川遺跡発掘調査報告』  
2014、『生野東遺跡発掘調査報告』  
2015、『大阪市北部遺跡群発掘調査報告』
- 大阪府1934、『百濟寺址の調査』大阪府史蹟名勝天然紀念物調査報告書4  
大阪府教育委員会1965、『河内百濟寺跡発掘調査概報』  
1972、『田辺廃寺跡発掘調査概要－柏原市田辺1丁目所在－』
- 狩野美那子2015、「百濟寺所用瓦の編年と考察」枚方市文化財研究調査会編『特別史跡 百濟寺跡』、枚方市教育委員会、425－440
- 古閑正浩2010、「河内百濟寺の造瓦組織と王権」『ヒストリア』第221号、大阪歴史学会、1－25
- 佐藤文子1995、「郊野の思想－長岡京域の周縁をめぐって－」『京都市歴史資料館紀要』第12号、41－70
- 佐藤隆1992、「平安時代における長原遺跡の動向」『長原遺跡発掘調査報告』Ⅴ、大阪市文化財協会、102－114  
2000、「古代難波地域の土器様相とその史的背景」『難波宮址の研究』第十一、大阪市文化財協会、253－265  
2014a、「難波宮の重圏文系軒瓦－型式設定の補遺、製作技法、年代論について－」『古代瓦研究』Ⅵ－大官大寺式・興福寺式・鴻盧館式軒瓦の展開－－重圏文系軒瓦の展開－、奈良文化財研究所、227－250  
2014b、「難波地域の土器編年からみた難波宮の造営年代」『難波宮と都城制』、吉川弘文館、78－99
- 積山洋2002、「難波京の変容－奈良末から平安前期の様相をめぐって－」『条里制・古代都市研究』第18号、条里制・古代都市研究会、117－136  
2010、「難波京と百濟王氏」『東アジアにおける難波宮と古代難波の国際的性格に関する総合研究』（研究代表者：積山洋）、大阪市文化財協会、125－54  
2012、「難波宮・京の廃絶とその後」『都城制研究』（6）－都城の廃絶とその後－、奈良女子大学古代学術研究センター、51－61
- 西本昌弘2014、「平安時代の難波津と難波宮」続日本紀研究会編『続日本紀と古代社会』、塙書房、235－259
- 枚方市文化財研究調査会2006、『禁野本町遺跡』Ⅲ－禁野本町遺跡第103－3次・103－4次調査報告書－  
2013、『禁野本町遺跡』Ⅳ－市立枚方市民病院の新病院整備事業に伴う禁野本町遺跡第172次調査報告書－  
2015、『特別史跡 百濟寺跡』、枚方市教育委員会
- 福永光司・千田稔・高橋徹1987、『日本の道教遺跡』、朝日新聞社
- 前田洋子1983、「大阪上町台地検出の屋瓦資料－飛鳥・奈良時代前期（白鳳期）の屋瓦とそれらを検出する遺跡－」『撰河泉文化資料』第31号、撰河泉地域史研究会、1－22
- 宮本佐知子・佐藤隆1996、「四天王寺とその周辺出土の古代瓦」『四天王寺旧境内遺跡発掘調査報告』Ⅰ、大阪市

文化財協会、93-119

村元健一2014、「発掘成果から見た平安時代の上町台地とその周辺」『大阪上町台地の総合的研究－東アジア史における都市の誕生・成長・再生の一類型－』（研究代表者：脇田修）、大阪文化財研究所・大阪歴史博物館、139-146

毛利光俊彦・花谷浩1991、「考察 屋瓦」『平城宮発掘調査報告』XⅢ 奈良国立文化財研究所、251-369

山本加三1926、「北田辺の一廃寺址について 河泉の古寺址其一」『考古学雑誌』第16巻第4号、日本考古学会、26-31

## Naniwa and Katano Around the Time of Capital Transfer to Nagaoka-kyo -Concerning Whereabouts of the Location of Kudaranokonikishi Clan's Home Base-

SATO Takashi

After the transfer of the capital to Nagaoka-kyo in 784, the archaeological evidences of Naniwa area were divided into two districts, around the Okawa River waterfront and around Shitenno-ji Temple. In these two districts the construction of the city toward the Middle Ages began. In contrast to such movements, the representative example which indicates the declining elements accompanied with the transfer of the capital is the clear decrease of remains of Saikudani Site, located near by the ancient temple "Kudara-niji".

In this paper, the author indicated new fact by comparative study of pottery and roof tiles excavated from Saikudani Site and Tanabe Haiji Site which are considered to be included in the range of "Kudara Gun"Kudara-ji Temple Site in Katano area, another base of Kudaranokonikishi clan in Kawachi-no-Kuni. The author clarified that the formation of streets with east and west, north and south were constructed in Kinyahonmachi Site which was the management foundation of Kudara-ji Temple in Katano area from the first half of the 8th century through re-investigating the chronological study of pottery. The movements in these two bases of Kudaranokonikishi clan before and after the transfer of the capital to Nagaoka-kyo will be important clues to know the background behind the historical great enterprise, the transfer of the capital.

